licular type であるものは少ない．また，転移巣は肺が最も多く次いで所属リンパ節であり，こうした器官に転移せず本症例のように他臓器にのみ転移を起こしたものは非常に稀なものであった．

8）顎関節症の軸位X線 CT 所見

林　孝文・益子　典子
佐藤　正治・小林富貴子（新潟大学歯科
中村　太保・伊藤　寿介　放射線科）

今回われわれは，顎関節症における軸位X線 CT の有用性について検討した．

対象は，臨床的に関節円板の位置異常が示唆された顎関節症105例（症例群）と，現在あるいは過去に顎関節症症状を認めないボランティア10例（正常群）．撮影は，RBL を基準平面とし，これに平行に下顎窩上端から下顎切痕までの範囲をスライス厚・スライス間隔とも 2 mm で施行した．撮影時の下顎位は閉口位，開口位，及び必要に応じてその他の下顎位を設定した．

その結果，症例群 105 例・210 関節中，93例・135 関節の下顎頭前方に半月状の軟組織を認めた．正常群では，10例・20関節中，1 例・1 関節のみであった．この軟組織は，明らかな関節円板の前方転位がある場合に出現するものと思われ，円板転位の診断に本法が有用であることが示唆された．今後症例を重ね，MRI 所見との比較検討を行ない，その診断精度を明らかにするつもりである．

9）下咽頭梨状窩瘻による急性化膿性甲状腺炎の2例

山本　貴子・斎藤　明（県立新発田病院 放射線科）
中野　徳・田口　哲夫（同　小児科）
渋谷　知子・鈴木　昌也（同　耳鼻咽喉科）

急性化膿性甲状腺炎の感染経路は下咽頭梨状窩瘻が大部分を占める．今回我々は下咽頭梨状窩瘻による急性化膿性甲状腺炎の2例を報告した．

症例1は右前頚部有痛性腫瘤を主訴とした10才女児．症例2は左前頚部有痛性腫瘤を主訴とした12才男児．超音波検査では甲状腺周囲膿瘍とそれに連続する瘻孔を描出できた．CT 検査では膿瘍と甲状腺との位置関係を明確にできた．下咽頭食道造影は瘻孔の確認に有用であった．

前頚部の炎症性腫瘤，特に小児の甲状腺部の炎症性腫瘤では本症を常に念頭におく必要がある．

10）耳下腺腫瘍の MRI

佐藤　洋子・佐藤　玲子
高橋　直也・木村　元政
酒井　邦夫　（新潟大学放射線科）

新潟大学付属病院で MRI が施行され，組織学的診断の明らかな耳下腺由来の腫瘍16例（多形腺腫7，Warthin 腫瘍3，悪性腫瘍6），及び転移性悪性腫瘍5例（悪性リンパ腫3，上咽頭癌1，横紋筋肉腫1）を対象に，MRI 所見，及び MRI の有用性について検討した．

多形腺腫は，T2W1 で著明な高信号，造影 T1W1 で耳下腺と等信号となるものが多く，Warthin 腫瘍は，内部が不均一で一個の腫瘍内に様々な信号強度がみられた．耳下腺由来の悪性腫瘍は，辺縁不整で境界不明瞭なものが多かった．Gd-DTPA による造影効果は，Adenoid cystic carcinoma は著明に強く，多形腺腫は中等度，Warthin 腫瘍及びその他の悪性腫瘍は軽度であった．

MRI は，CT で正常耳下腺とコントラストが不良の腫瘍，深葉の腫瘍，顔面神経に沿って進展する腫瘍の描出に優れていた．また CT に比し義歯のアーチファクトが少なく，冠状断像で上下の位置関係をよく描出し，術後の瘢痕と腫瘍再発の鑑別が可能な例がみられた．

11）二酸化窒素急性曝露の1例

青木　千夏・岡田　稔
花岡　秀人・吉野　綾子
横山　健一・似鳥　俊明
高山　誠・蜂屋　順一
古屋　儀郎　（杏林大学放射線科）

症例はメッキ工場勤務の40歳男性．硝酸取扱い中に発生した NO_2 を吸入，翌日呼吸困難にて近医受診，胸部単純写真にて異常陰影みられたため当院転院となった．入院時胸部単純写真および CT で両肺野に肺水腫によると思われるびまん性の斑状陰影を認めた．呼吸管理を主体とした治療にて症状およびX線所見の改善がみられ，4日後の胸部単純写真で異常陰影はほぼ消失し，約10日後には CT でも異常所見はみられなかった．NO_2 吸入による肺障害では肺水腫による急性期，それに引き続く無症状期，その後に進行性呼吸障害のみられる時期のあることが知られており，本症ではその病態生理と臨床像の特徴を理解することが重要と考えられた．